

大学新時代
革新する
総合大学
VOL.12

「インベンション」を「イノベーション」につなげる人材の育成が重要な課題に

グローバル化が急速に進む中で、国際社会の多様なシステムのイノベーションが課題になっている。こうした課題の解決に向け、東洋大学に今年1月、「グローバル・イノベーション学研究センター」が発足。「グローバル・イノベーション学」という新たな学問体系の創造・確立を目指す取り組みをスタートさせた。また、2017年度には「国際学部グローバル・イノベーション学科^{*}」の開設も構想している。今後、どのような教育・研究を展開していくのか。元経済財政政策担当大臣で、2016年4月から同センターのセンター長に就任予定の竹中平蔵氏に伺った。

グローバル・イノベーションのメカニズムと相互作用を追究

2012年に英「エコノミスト」誌が、2050年の世界を予測した「メガチェンジ2050」を発表しました。私が強烈な印象を受けたのが、「グローバルイノベーションはどんな反発があっても徹底して進む。その中で英語は国際語の王座として君臨し続ける」「21世紀はシュンペーター（イノベーションが経済を変動させるという理論を構築した経済学者）が唱えたイノベーション競争の時代になる」という2つの指摘です。

確かに、グローバルとイノベーションが今後の国際社会を進展させるキー

ワードになることは間違いありません。しかも、それぞれが相互に影響し合っているところに特徴があります。グローバル化が進行したのは、東西冷戦構造が終わり、市場経済と社会主義計画経済が統合され、マーケットが拡大したことが最大の要因といわれますが、見逃さないのはグローバル化を可能にしたイノベーションの存在です。インターネットに象徴される科学技術のイノベーションによって、情報を世界中へ瞬時に伝えられるようになり、市場規模が急速に拡大したのです。こうして生まれたグローバルな競争が、また新しいイノベーションを生み出すというように、互いに影響し合う不可分なものなのです。

こうしたグローバルとイノベーションのメカニズムと相互作用を追究するために、今年1月、東洋大学が開設したのが「グローバル・イノベーション学研究センター」です。「グローバル・イノベーション学」という新たな学問体系の創造・確立を目指しています。

一口にグローバルといっても、これまでの日本は欧米とアジアの一部にしか目が向いていませんでした。しかし、世界はより大きなスケールで変動しています。先述した「メガチェンジ2050」では、2050年の世界をリードするのはアフリカ経済だと予測しています。そこで、本センターではアフリカあるいは南米などのエマージング・カントリー（新興経済国）の情報収集と人的交流が、重要なテーマの1つになります。

私はグローバル化を進めるためのキーワードは「インテレクトチュアル・エクスチェンジ（知的交流）」だと考えています。日米の強固な関係は、相互理解に貢献できるリーダーを養成するフルブライト交流事業に象徴される教育交流プログラムなどの知的交流がベースになっています。それに対して、日本と中国やASEANの間では、知的交流の前にビジネスの交流が深まり、経済構造ができたことが、現在の混迷を招いている気がします。そのため、グローバル社会の基盤を構築するためには、研究者や学生に諸外国との知的交流の機会を提供することが不可欠であり、本センターではそのシステム構築に力を注ぐ予定です。

東洋大学は2014年度、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援（タイプB）」に採択されており、現在進

められている事業とセンターで構想している知的交流を連動させることで、東洋大学全体の教育・研究活動との連携が大きいと期待されます。

第4次産業革命によるイノベーションが今年の「ダボス会議」のテーマに

さらに、東洋大学は2017年度に「国際学部グローバル・イノベーション学科^{*}」の開設を構想しています。

私は、グローバルな視点でイノベーション（発明）をイノベーション（革新）につなげられる人材の育成を、この学科の使命にしたいと考えています。

トーマス・エジソンの偉大さは、電気メカニズム解明というイノベーションだけではなく、会社を興し、電気を販売する仕組みを作って社会に定着させた、すなわちイノベーションにつなげた功績も大きいのです。

日本は数多くの科学技術のイノベーションを生み出しています。けれども、それを社会で実際に活用し、定着させるプロセスのシステム構築は十分ではありません。当然、サステナブル（持続可能）な科学技術にするためには、利益を確保することも重要になります。様々な視点で考え、発想し、柔軟な感性を持って、イノベーションを創造できる人材の育成は急務なのです。

そのために、「グローバル・イノベーション学科^{*}」では、最新の科学技術に常にアンテナを張って、知見を広げるとともに、その利用可能性を考える力を養いたいと考えています。

いま世界では、次々に画期的な科学技術が生まれ、社会を革新しようとしています。私が理事を務める「世界経済フォーラム（ダボス会議）」に今年も出席しましたが、そこでは「第4次産業革命（インダストリー4.0）の可能性や社会にもたらす影響」がテーマの1つでし

た。AI（人工知能）やそれを用いたロボットなどが、今後の世界をどのように変えていくのか、世界の政治経済リーダーにとってもイノベーションが重要なテーマになっていることが分かります。

そして、第4次産業革命の1つとして取り上げられ、速やかな対応を迫られているのが「シェアリングエコノミー」です。いわゆる民泊や、自動車の貸し借りなどを、インターネットを使って仲介するサービスが驚異的な勢いで拡大しているのです。日本の法律からすれば、グレーゾーンの事業であるため、例えば民泊に関しては、現在、旅館業法の適用範囲を広げて、「簡易宿所」として位置づけようという動きが進行しています。一方、自動車の貸し借りサービスの会社は、自らをタクシー業とは考えていません。民泊の仲介会社もホテル・旅館業とは異なる業態だと捉えています。いずれも「ソーシャルネットワーク業」として展開しているのです。既存の業界の枠組みにはめ込むのではなく、まったく新しい業態として認識し、新しいシステムを考える視点も必要ではないでしょうか。「グローバル・イノベーション学科^{*}」では、そうした多様な視点で物事を考え、発想できる人材を育成します。

イノベーションに不可欠な哲学とリベラルアーツ

また、イノベーションを社会に定着させるためには、経済性だけを念頭に置いてはいけません。文化、芸術なども包括した形でイノベーションを進めることが必要です。そこで、「グローバル・イノベーション学科^{*}」では、リベラルアーツ教育も重視する予定です。

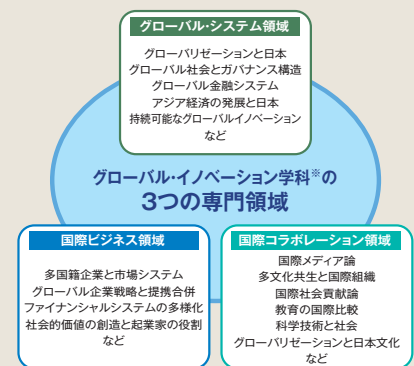
さらに、新しい発想からイノベーションを起こすには、先入観や固定観念にとらわれることのない物事の見方や考え方

を学ぶ哲学も重要になります。そこに東洋大学が設置する学科ならではの強みも生まれるでしょう。東洋大学は創立者・井上円了の理念に基づいて「哲学教育」を継承してきました。そのDNAが、グローバル社会でイノベーションを起こす上で何よりも重要になるのです。米・マサチューセッツ工科大学（MIT）でよく使われる言葉に「Compass Over Maps（地図よりもコンパス）」があります。変化の激しい現代において、産業界の地図はどんどん描き換わり、すぐに役に立たなくなってしまう。そうした困難な時代を生き抜くには、コンパス（指針）こそが大切になるわけです。学生には、そのベースとなる哲学をしっかり教育し、熱い志を持って、グローバル・イノベーションの可能性を追求する力を育みたいと考えています。

国際学部 グローバル・イノベーション学科^{*}

世界を舞台に活躍し、地球社会の発展に貢献する人材を育成

経済、貧困、資源、環境、紛争など、様々な課題が新たに発生しているグローバルな社会の新しい展開に向けて、様々なシステムにイノベーションを起こすリーダーシップ力や、課題を解決できる知識と能力を養成する教育を展開します。



そのため、すべての授業を原則英語で行い、日本人学生には海外への長期留学（1年間）を必須化。また、定員の約30%で外国人留学生を受け入れ、異文化交流も積極的に促進する予定です。

※2016年3月現在、設置構想中。学部・学科名は仮称であり、計画内容は変更になる可能性があります。



東洋大学
グローバル・イノベーション学
研究センター長
(2016年4月就任予定)
竹中 平蔵氏

たけなかへいさう 2001年経済財政政策担当大臣。2002年金融担当大臣・経済財政政策担当大臣。2004年経済財政政策・郵政民営化担当大臣。2005年からは総務大臣・郵政民営化担当大臣を歴任。2016年3月から東洋大学グローバル・イノベーション学研究センター客員研究員を務め、4月からセンター長に就任予定。現在は国家戦略特別区域諮問会議のメンバーなど多方面に活躍。